

# 中日文化比較論

## ～風俗習慣から意識形成まで～

701-029 楊 叡 指導教官 千葉 貢

Comparative Arguments Focused on Chinese and Japanese Cultures:  
From Etiquette and Customs to the Formulation of Ways of Thinking

YANG Rui

### I はじめに

私は七年前に来日した。そのとき日本語についての知識は全然なく、勿論一言も喋る事は出来なかった。ただ、思ったのは、同じ黒い目と髪をして、同じ黄色い肌で、また同じ漢字を使う間柄で親近感があった。しかし、親近感があったといっても、色々なことを学び、見たり聞いたりする度に、どこかが少し違っているのではないかと考えるようになった。そこで中国文化と日本文化を比較して見ることで両国の文化の違いを考えて見ようと思った。

### II 中日言語文化の差異

「中日言語文化の比較」の章では、「尊敬語の表現」、「ボカシの表現」、「漢字文化とカナ文化」という三つの節がある。これらについて、自分の体験から感じた両国の言語上の差異、またその違いの根本的な原因を自分なりに述べて見た。

例を挙げれば、日本人にとってなんでもない「お二階」の言い方であるが、わたしのような外国人から考えると、「二階」に「お」が付くなら、「三階、四階」にも当然「お」を付けるだろう、と。しかし違うのだ。このほかにも「おいも」、「お酢」、「おすまし」、「おそば」という言い方があるが、「おトマト」、「お胡椒」、「お茶わん蒸し」、「おラーメン」とは言わない。短い音節のものに「お」を付け、長いものには付けないのかと思うと必ずしもそうではなく、「おだいこん」という同じ根菜でも大根には「お」をつけるが、ニンジンやごぼうには付けない。海産物で言えば「お魚」「お

刺身」とは言うが、「お鯛」「おマグロ」など個々の魚に「お」を付けることはない。なんらかの法則があるのだらうと思ひ、色々考えて見たが、ますますわからなくなった。

このように、「お」とかまた「ご」とか、接頭語を用いる言葉は辻村敏樹の『現代の敬語』によれば、「美化語」という。前記の「お」や「ご」の付く言葉をよく見れば、日本人は日常生活の中で頻繁に美化語を使っているということがわかる。この独特の美化語は日本人の国民性を表しているのではないだろうか。日本人自身はそう思っていないかもしれないが、中国人と比べると、日本人は美しい自然に感化されて美的情緒が洗練されて、自然の恵みに常に感謝するという気持ちを持っている。その結果として、日本人はこの美化語を発達させてきたのではなからうか。

以上に対して、中国語には文法的な敬語の系統はない。また、「お」というのは漢字で「御」の字を書く。昔の中国では皇帝しか使えなかった言葉である。皇帝は中国で「唯我独尊」の存在なので、「御」という字はもちろん百姓とは無縁だ。当然日常に「御」を使う習慣も残されなかったのだらう。

敬語がないことは中国人にどのような影響を与えているのかということ、集団内部では年齢により、また先輩、後輩などの関係により、個人の能力が重視され、年齢や地位が異なっても平等な人間関係が形成されている。目上の人に対しても堂々と反論や異議を提出することができる。

しかし、日本人は「ボカシの表現法」、つまり断言しない言い方を好む。なぜ日本人にとって「ボカシの表現法」が生活の中で大きな役割を果たしているのかということ、日本の社会は同質、相対的に単一民族から成り立っているのだと思ひ込んでおり、歴史的にも島国で外からの侵入を経験せず、仲間との結び付きが強いため仲間との摩擦を嫌うためだからだといえる。この個人より「人の和」を大切にする社会では、言葉にも以上のように影響が見られる。特に「いいえ」をはっきり言わない傾向がある。これは、生活共同体の狭い範囲で相手を傷つけないためで、どうしても言わなければならない時には、「ボカシの表現法」が多く用いられる。日本人の曖昧な表現に対して、中国人は好き嫌いをはっきりいう。中国人は言うべきことをはっきり相手に承知させたうえで、本当の付き合いが始まる。また、何かがあった時もやはり、お互いの考えを推測するのではなく、ずばりと自分の言い分を言って、解決方法を求める。このようになんでもはっきりいう特徴があるからこそ、中国語では曖昧な表現がしにくいのである。

### III 中日生活様式の比較

「中日生活様式の比較」の章においては、中日両国が各自の独特の風土から成り立つ日常生活の衣、食、住のスタイルについて比較して見た。また、「食」の節では、「食と風土」、「食文化」、「酒文化」、「住」の節では「住居様式」、「風呂とトイレの場合」に分けて詳しく紹介した。例えば、和服は外来文化の影響を受けたのか、夏が高温多湿、冬が低温低湿の気候にも影響を受けて、今の寛容開放的で防暑的な前開きの形になった。衣服以外、畳の使用、靴を脱ぐ習慣、下駄の使用なども、

その地域の気候に順応した特徴である。

また、住居様式についても、両国が独自の文化を表している。日本は座る文化に対して中国は立つ文化である。その特徴はまた衣服の様式に影響を与えて、今の正座にぴったりとした和服と立つ時に最も美しく見えるチャイナドレスがあった。食については、中国は南の米・魚文化と北の麦・肉文化である。地域や民族によって、食生活が大きく違っていて、一万種以上の中国料理もある併存文化だが、日本料理の特徴は野菜と魚介類を中心として、季節による材料を重視し、また味覚を満足させるように、形や色に注意を払い、淡泊な味を重んずるところにある。そのほか、外来のものを吸収、同化していく融合文化である。

#### IV 中日生活文化の比較

「中日生活文化の比較」の章の中では、「生活習慣」、「年中行事」、「風俗習慣」、「宗教と信仰」、「非日常祝祭」に関して、両国におけるそれぞれの差異および原因を究明した。その中で一番力を入れたのは「非日常祝祭」の「誕生」、「結婚」、「死亡」の項である。年中行事のように毎年御祝い事があるのに対して、誕生、結婚、死亡という幾つかの重要な節目は、国籍に関係なく、ほとんどの人間にとって、一生に一回しかない。このような非日常祝祭は国や民族文化の特徴を最も著しく現す場となる。

例えば結婚を例に、両国の結婚式について、分かりやすい差異は日本が白を清潔の象徴として結婚式でよく用いる。中国は白色を忌む国である。赤い色はめでたい色と考え、「これでもか」と言っていていいほど赤い色を用いる。また、日本の結婚式は宗教との関わりがあるが、中国は主に儒教の伝統儀式作法で行う。結婚式の日取りを決めるのは両国とも吉日を選ぶが、日本は大安、先勝、友引などの吉日を選ぶ。中国は偶数の月の偶数の日を選ぶ。

以上の特徴以外、中国の結婚式に「拝堂」、「鬧洞房」といういくつかの独特の儀式がある。その儀式が特別な意味を持っている。具体的にいうと、鬧洞房の儀式には、騒ぎを通じて新婦と新郎の親族とを打ちとけさせる意味があると同時に、娘から主婦へと役割転換した新婦に、一人前の嫁として家族、宗族、親戚および周りの人々とつきあうのに必要な度胸と忍耐力を身につけさせようとする意味もあるものと思う。また、同じ「鬧洞房」の儀式でも、農村の「鬧洞房」は、親族集団に加入したばかりの者に対する教育を儀式化したものであった。一方、都市部の「鬧洞房」においては、本来の新婦に対する教育としての意味が失われ、新郎・新婦と双方の友人とのその後のコミュニケーションを円滑にするための儀式になっている。この違いは、農村女性の完全には自立していない地位と、都市部の働いている女性の十分に自立した地位との対比を如実に反映していると思う。

一方、今も昔も農村・都市を問わず、新婚夫婦への祝福の中に見られる子孫の繁栄への願いは不変のテーマである。子孫の繁栄は、当事者の老後の保障にもなるのはもちろんのこと、父系出自集団の持続の前提でもある。中国人の価値体系の中で今も重要な位置を占めている家族とその持続に

対する期待が、結婚式というイベントの中にも表されていると言える。

## V 中日民間遊戯の比較

この章では、凧揚げ、相撲、竹馬という両国共有の遊戯について、その歴史と各自の国での役割を比べて見た。例えば凧揚げにおいては、その歴史と進化を究明する上で、凧という道具は遊戯に用いられるだけではなく、軍事戦争にも使われていた。日本では商売の宣伝にも使われた。そのほかに、中国ではもう一つの役目があるのではないかと考えた。清の長編小説『紅樓夢』の第七十回に、ある話しが書かれている。それを訳すと「凧を揚げることによって悪運を払うというのが凧揚げの一つの楽しみである。あなたは多病だからこそ、もっと凧を揚げて、病気を連れ出すようにして」。この文から見ると、古代の人々は、凧を揚げることと悪運を払うこととを結びつけて考えていたのではないか。今でも、中国の山東省のある地方では、名前を凧に書いて揚げる人がたくさんいる。凧が高空に昇ってから、わざと糸を切る。この行動は悪運が切られた凧のように遠くまで飛んでいけとの願いを含んでいるのではないかと考えてもいいだろう。また、お年寄りには空から落ちた他人の凧を拾うことを忌むそうである。具体的になぜ忌むのかははっきり言われてないが、恐らく他人が悪運を払うために飛ばした凧を拾うのは不吉であると思うからなのではなかろうか。

そして、凧揚げという遊戯が現在まで続けられたのは、健康にもよいらなのであろう。なぜかという、中国の医学的な角度から見ると、凧揚げをする季節はだいたい春で、気候は比較的乾燥している。凧を揚げるとき、ほとんどのひとは口を開けて見るが、この動作によって、長い間体内に積もっていた熱が発散できるそうだ。

## VI もっと中国人を知るために

「もっと中国人を知るために」の章では、「中国人と日本人の人生哲学を比較して」、「中国人と日本人の義理人情」、「中国人の対称感覚を例に」という三つの節を通じて、中国人と日本人の内面的な考え方などに触れて見た。

例えば中国人は中庸の思想を持っている。日本人によく知られている「漢方」には「陰、陽」「表、裏」「寒、熱」「虚、実」という概念が隠されている。例を挙げると、果物は肌にいいからといって、みかんをいっぱい食べると、体内の熱を起こして、吹き出物が出やすい。また、梨は体内の毒を排除できて、利尿の効果があるが、食べすぎによって、体が冷やされ、生理中の女性にとってまさに逆の効果が表われる。このように漢方では、陰、表、寒、虚に対して陽、裏、熱、実の方になりすぎると、病気になる。それぞれバランスがとれている状態が一番健康であるのだ。この漢方の概念は中国人の人生哲学をよく表している。

このような哲学は日常生活の各面に表している。それに対して、日本人は偏っているではなかる

うか。日本語では、児童生徒の保護者のことを「父兄」と言って、女性は保護者の数に入らないようだが、中国では児童生徒の保護者を「家長」という。父親と母親と両方とも「家長」なのである。したがって、PTAには、父親母親を問わず積極的に参加する。教育やしつけは母親の担当などという分業意識はない。この点で日本は対照的だ。

義理人情の点では、なぜ経済観念の発達した日本人が義理人情を大切にするのだろうか。それは中国人と比べて一番違うところは、中国人の行動原理が利己主義を中心としているのに対して、日本人はグループの利益、もしくは公益を優先させているためではないだろうか。これに対して、中国人が結局あてにできるのは、家族の延長線の上にある人間関係が一番であると考えられる。「袖すり合うも他生の縁」と言われるが、中国人が一番大切にするのはそうした「人縁」である。

## VII 終わりに

古来日本人は中国を文化のルーツであり、理想的な「孔孟の国」であると思い、あまりにも尊敬し過ぎて誤解をしてきたのではなかろうか。それが明治以降、全く逆の誤解が始まったと思われる。日本人の中国観は良きにつけ悪きにつけ、あまりにも色眼鏡をかけて見がちなのではなかろうか。「中国大好き人間」は、その眼鏡でアバタもエクボに見る。また「中国大嫌い人間」は、その眼鏡でエクボもアバタとして見るのではなかろうか。だから日本だけのものさしで中国を見るのではなく、中国には中国のものさしがあるのだと言う事を理解してもらって中国を見て貰いたいと思う。同じことを中国人に対してもいえる。既存のイデオロギーではなく、實際を基準にして見て貰いたい。また局部的現象を見て全体だと判断して欲しくない。そのためには文化、言語、慣習、風俗にもお互いに違うものさしをもっているのだと言うことを認め合いながら、同一の漢字文化の発展にお互い努め合いたいものだと思う。

また、日中両国の国交が正常化になって30年のところで、これから両国間の相互交流は一層と拡大する傾向である。そして、新たな誤解や障壁が交流の中から生じてきて、文化交流に影響を与えるだけでなく、盛んになる経済交流にもダメージを与えようと思う。例えば、今までの研究で、中国と日本は遊牧・農耕民族と農耕民族、多民族と相対的な単一民族、大陸と島国、戦乱の歴史と比較的平穏な社会、伝統固有文化の継承と外来文化の導入・同化など対照的な側面をもつことが究明された。そして、その上で、言語の特徴では中国は主張が率直、日本の言葉は曖昧さがある、日本人は繊細、慎重で完璧主義だが、中国人は大らかで臨機応変の傾向があるということなどもわかった。しかし経済活動に移ると、前記の特徴や差異は新たな障壁に変わると思う。中国に進出した日系会社を例として挙げれば、日本は当初の計画の綿密さを求めるが、中国は全体の枠組みを重んじ、柔軟性を持たせる。中国の会社はまず商売相手を信頼できるかどうか観察するが、日本人はすぐ信用しがちである。中国は利潤配分を主張するが、日本は内部留保を主張する。このような感覚の違いから生じる矛盾を取り除くには、両国間の決定的な異文化差を心身ともに理解しない限り、日本

人と中国人は永遠に水と油の状態になる。そして、お互いの言語や文化の相互理解を図っていくという姿勢は双方にとって不可欠な作業であり、今後の日中関係全般にも必要な態度であると思う。

参考文献：

- |              |       |           |       |
|--------------|-------|-----------|-------|
| 『現代の敬語』      | 辻村敏樹  | 共文社       | 1967  |
| 『外国語としての日本語』 | 佐々木瑞枝 | 講談社       | 1994  |
| 『世界の生活文化』    | 別技篤彦  | 帝国書院      | 1990  |
| 『自然医食のすすめ』   | 森下敬一  | 美土里書房     | 1982  |
| 『「湿気」の日本文化』  | 神崎宣武  | 日本経済新聞社   | 1992  |
| 『日本仰天起源』     | 荒俣宏   | 集英社文庫     | 1994  |
| 『中国の年中行事』    | 中村喬   | 平凡社選書     | 1998  |
| 『日本の行事』      | 小松和彦  | 大洋出版社     | 1993  |
| 『中国文化伝来事典』   | 寺尾善雄  | 河出書房新社    | 1998  |
| 『日本書記』       | 坂本太郎  | 岩波書店      | 1967  |
| 『中国人精神構造の研究』 | 大谷孝太郎 | 東亜同文書院    | 1935  |
| 『日本人の海外不適應』  | 稲村博   | 日本放送出版社   | 1980  |
| 『了解 日本人』     | 楊寧一   | 天津人民出版社   | 2001  |
| 『喪葬習俗』       | 雷紹鋒など | 湖北教育出版社   | 2001  |
| 『中国喪葬礼俗』     | 李学勤   | 中国人民大学出版社 | 1990  |
| 『紅樓夢』        | 曹雪芹   | 上海古籍出版    | 1995  |
| 『研究史 平安京』    | 井上 満郎 | 吉川弘文館     | 昭和53年 |
| 『中国人の心理と行動』  | 園田茂人  | 日本放送出版協会  | 2001  |
| 『遊戯風情』       | 趙慶偉など | 湖北教育出版社   | 2001  |